

心に響く人生の匠たち

「千人回峰」というタイトルは、比叡山の峰々を千日かけて駆け廻り、悟りを開く天台宗の修行「千日回峰」から拝借したものです。千人の方々とお会いして、その哲学・行動の深淵に触れたいと願い、この連載を続けています。

逆風の中、父が創り上げた事業を再構築し新たな価値を提供する

【長野県池田町発】快晴の祝日、私たち取材クルーは晩秋の安曇野を目指した。長野駅からクルマでおよそ1時間半。北アルプスの山々は美しく色づき、稜線にはわずかに雪の姿が認められる。池田町の中心街から外れ、つづら折りの急な山道をしばらく行くと「カミツレの里」に到着する。温かく迎えてくれた北條裕子さん、創業経営者である父君の跡を継ぎ、コロナ禍の下でもマルチな活躍をされている。美しい自然の中で、ビジネスの厳しさと新たな事業展開についてじっくりと話を聞くことができた。
(本紙主幹・奥田喜久男)

コロナ禍の下 印刷事業からの撤退を決断する

奥田 北條さんが社長を務めるSouGoは、国産・農業不使用栽培のカモミールから抽出したカミツレエキスの入浴剤「華密恋(かみつれん)」の製造・販売など、複数の事業を展開されていますが、もともとは印刷業を営まれていたそうですね。

北條 ここ長野県池田町出身の父が上京して、昭和24年、24歳のときに中央区で友人たちと印刷業を始め、昭和34年に相互印刷工業株式会社を設立しました。印刷業は当社の柱だったのですが、コロナ禍の影響が大きく、今年(2021年)3月末でこの事業からは撤退しました。

奥田 それは大変でしたね。

北條 大手企業さまからの印刷物を数多く任されていたのですが、大きな売上を占めていた得意先からの昨年(2020年)上期の発注はゼロで、これはいよいよ厳しいということで、印刷のほうは閉めようと決断しました。東陽町にあった5階建ての自社ビルも同時に処分しました。

奥田 ちなみに、印刷部門には何人くらいの方が働いていたのですか。

北條 90人ほどですね。知り合いの伝手をたどって、8割ほどは受け入れてもらい、得意先からの仕

事も一緒に移す形をとりました。

奥田 経営者として、とても重い決断をされたのですね。

北條 創業者である父はすでに亡くなっていますが、天国で怒っているかもしれませんね(笑)。このコロナ禍で、あらためて経営の大変さを思い知らされました。

奥田 その後の事業構成は、どのようになっていますか。

北條 国産カモミールにこだわったスキンケアブランド「華密恋」、その原料となるカモミールの栽培やカミツレエキスの製造、エキス抽出後の残渣を含めカモミールを活用した商品を創造・提案する「カミツレ研究所」、今日おいでいただいた「八寿恵荘」との三つのブランド展開を柱にしています。

北條裕子

Hiroko Kitajo

SouGo

代表取締役社長



PROFILE 1965年、東京都世田谷区生まれ。玉川学園女子短期大学卒業後、印刷の専門学校である日本プリンティングアカデミーに学ぶ。3年間の印刷企画会社勤務を経て、父・北條晴久氏が創業した相互印刷工業(現SouGo)に入社。2015年、同社代表取締役社長に就任。一般社団法人深川アートバラ代表理事も務める。



奥田 それはすごいことですね。

北條 その効果に感銘を受けた父は漢方やハーブのことを学ぶようになり、そこでカミツレとの出会いがありました。そして、自身の経験からもこれを世に広めたいという思いからエキスを商品化し、カミツレエキス100%の入浴剤として発売したのが1982年のことです。来年(2022年)で発売して満40年になります。

奥田 たいへんなロングセラー商品ですね。ところでお父さまは、もともとそうしたことに関心があったのでしょうか。

北條 そうですね。昔から健康を重要視するところがありました。私が小学生の頃、玄米を食べさせられたこともありますし、環境に対しても配慮するタイプだったと思います。

奥田 ある意味、時代を先取りした意識をもって事業を進められてきたのですね。いま、企業に求められているSDGsなどの発想にも合致しているように思えます。

北條 かつて行っていた印刷事業でも、持続可能な資材やインキなどを使用し、環境に配慮した印刷物を提案していました。そうしたことを振り返ると、健康を重視し環境を大切にするという父の発想は一貫していたのだと思います。

奥田 現在の事業の柱の一つであるカミツレエキスの製造工程について、簡単に説明していただけますか。

北條 カミツレの生産は、このカミツレの里にある自社農園をはじめ、18都道府県、31か所で無農薬・無化学肥料での栽培を行っています。晩夏から秋にかけて種をまき、その後定植し、翌年の春から初夏にかけて収穫します。

奥田 ここだけではなく、全国各地の契約農家に生産を委託していると……。農業を使わず有機肥料での栽培というだけで難しそうなのに、その生産ネットワークを広げていくのも簡単ではありませんね。

北條 そうですね。人伝てで紹介していただいて、地道に広がっていています。生産農家さんの例を挙げると、生産量が最も多い大垣市葉草組合では、減反政策による休耕地を利用し、もう40年間近くカミツレ栽培をしてもらっています。また、農家によっては米との二毛作にも取り組んでいて、最近、後継者不足で増加している耕作放棄地の利用も行われています。

奥田 なるほど、農地の有効活用という面にも貢献しているのですね。

北條 各地で生産されたカミツレは、カミツレの里にあるエキス製造工場に送られてきます。

奥田 それで、収穫した後はどうなるのですか。

北條 各地で生産されたカミツレは、カミツレの里にあるエキス製造工場に送られてきます。

構成／小林茂樹
Ttext by Shigeki Kobayashi
撮影／笠間直
photo by Nao Kasama

2021.11.23 / 長野県北安曇郡池田町の八寿恵荘にて

お父さまが使っていた小銭入れ



お父さまは、この小銭入れを鍵のケースとして使っていたそう。若い頃、ときには反発したこともあったが、同時に尊敬し、いつかは越えたいと思う存在だったという。「創業者である父の考えを大切に継承しながら、会社を発展させよう」という思いから、この小銭入れを常に持ち歩いているんです」と北條さんは話してくれた。ちなみに、北條さんもお父さまと同じように鍵のケースにしているそう。

まず原料を選別し、仕込み、熟成、ろ過、二度目の漬け込み(仕込み・ろ過)、充填というプロセスを経て完成します。入浴剤は100%カミツレエキスなので、その他の成分を加えたり薄めたりすることなくそのまま容器に詰められるのです。販路は自社通販サイトと卸の2通りで、コスメセレクトショップやロフトなどのバラエティショップでも取り扱っていただいています。
奥田 原材料の調達から販路開拓まで、見事に一貫していますね。すごい! (つづく)

BCNは「ものづくりの環」を支える育むメディア企業です



「ものづくりの環」の詩

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意(おもい)が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰(対談連載)」で公開中です。
<https://www.bcnretail.com/hitoarite/>